

令和3年度 研究評価報告書【畜産試験場】

1 概要

試験研究機関における課題選定をはじめ、研究途上の課題の進捗状況、研究成果、研究成果の普及状況等について検討・評価し、試験・研究開発の効率化を図ることや積極的な情報公開により幅広く意見を取り入れ、試験・研究開発の活性化を目的に、「福井県農林水産試験研究評価実施要領」および「福井県農林水産業活性化支援研究評価会議設置要領」に基づき、研究成果および研究終了後の成果の普及状況等について評価を受けた。

(1) 開催日時 書面開催 令和3年8月27日評価〆切

(3) 評価委員

三森 眞琴 国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構畜産研究部門
研究推進部長

三浦孝太郎 公立大学法人福井県立大学生物資源学部 准教授

吉田 美香 福井県食肉事業協同組合連合会 事務局

黒川 友紀子 有限会社 黒川産業

関山 真民 芦原温泉女将の会（あわらグランドホテル女将）

竹内 将史 福井県農林水産部中山間農業・畜産課 課長

2 評価結果

課題評価は、事前に評価委員に資料を郵送し評価を頂く形式であったが、新任評価委員である吉田委員、黒川委員、関山委員については、個別に畜産試験場においてあるいは評価委員を訪問することにより研究担当者が研究の背景、目的、内容、実施方法および成果など郵送した資料について直接説明を行い、後日委員から封書による評価を受け取った。

評価結果は各評価委員の平均を総合評価とし、さらに指導、意見をコメントとして記載している。

研究課題別評価

事後評価：1 課題 B 評価

追跡評価：1 課題 C 評価

研究課題別の詳細は、研究課題別評価結果に記載し、今後の研究開発の推進、成果の普及方法等に活用する。

3 研究課題別評価結果

(1) 事後評価

1	研究課題	ビタミン B1 の多い機能性豚肉生産技術の開発	総合 評価	B
	研究期間	平成 29 年度～令和元年度		
	研究目的 および必要 性	全国の 400 以上ある銘柄豚より優位性を確保するため、消費者の購買意欲を刺激するセールスポイントとして県産米ぬかをビタミン B1 供給源として、ビタミン B1 の含有量を高めた豚肉の生産技術を開発する。		
	主な意見	<ul style="list-style-type: none"> ・県産米ぬかを有効活用することで、ビタミン B1 を多く含む豚肉生産が可能となる技術と考える。飼料代の低減を図ると同時に特色のある豚肉生産による福井県産豚肉のブランドを目指しているところが良い。 ・本技術によりロース肉中のビタミン B1 含有量が 1.6 倍増加することを示したことから、研究目標は達成できたと認められる。 ・波及効果については、販売価格や生産頭数についてのより詳細な検討や普及計画が必要。より地域の特色を出せると良い。 ・ほとんど無料で手に入る米ぬかを用いて豚の機能性を向上できるのはすばらしい。 ・ビタミン B1 の多い機能性豚肉の生産技術の開発という点からみると効果大である。この研究の成果を生かせるようにまずふくいポークの復活を心から願う。 ・実勢際にふくいポークが生産再開されるまでに、配合飼料の中にどう配合していくのかを追求していく必要があると感じる。生産者が扱いやすく、普及の進む与え方まで考えると、ふくいポークが再開された時も、スムーズに「VB1 の多い豚肉」とセールスポイントとして打ち出せると考える。 ・ビタミン B1 の含有量が 1.6 倍と研究成果で得られた中、県内養豚農家が不在という大変残念な状況。安心安全な養豚業の費用対効果を得るためにも、臭い等の風評を払拭し広く県民へ県産豚の重要性を SNS 等で発信する啓蒙活動を断続し 1 日も早い養豚業の拡充に期待する。 ・豚肉の機能性向上に加え、飼料費が削減され所得向上につながる技術であり評価できる。 		

(2) 追跡評価

1	研究課題	立毛乾燥技術を用いた飼料用米粳長期保存技術	総合 評価	C
	研究期間	平成27年度～28年度		
	研究目的 および 必要性	現在の飼料用粳米の利用形態として乾燥粳米と、ソフトグレイ ンサイレージ (SGS) があるが、乾燥粳米では、乾燥コストと保 管場所の確保が、SGS では調製の労力と高水分による腐敗が問題 となっている。本研究では、刈取り前に稲を圃場で乾燥させる立 毛乾燥と乳酸菌添加による発酵を組み合わせることで乾燥作業が省 略でき、屋外でも保存できる技術を開発する。		
	主な意見	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自給飼料としての飼料用粳米の利用促進のための技術として開 発され、活用している農家もあることから技術としては普及レ ベルであると判断される。 ・ 研究開始当初と粳米についての状況が変化し、当初見込んだ普 及効果は得られなかったが、粳米の活用を図ったことは、飼料 用米の普及の一助になったと考えられる。 ・ 今後も飼料用米に対する需要の変化等により活用が進むことも 想定される。 ・ 飼料費の低減という点においてはとても効果が出ていると思 う。防鳥対策等が必要であったり、コスト面の問題も多少出て くるかもしれないが、それよりも飼料費の低減へのメリットが 上回るようになる工夫と、作業の負担を減らすことが一番の課 題だと感じる。 ・ 当時 (H26) の状況では必要な研究だったと思われるが、現在、 JA が飼料用米の買い取り、販売する事により立毛乾燥および、 乳酸菌添加にての長期保存技術が活用される場面は少ないと考 える。 ・ 現在における波及効果は少ないと思われるが、これからも飼 料価格が上がる事が予想されるなかで、牛だけでなく、他の畜 産分野においても、考え方の応用がきくと感じる。 ・ 研究当時に比べ、飼料用米に関する状況が変化し、開発した技 術が活用されにくくなったことは理解できる。 ・ 乳酸菌添加による長期保存技術は、牛だけでなく鶏や豚にも活 用できるので、今後コスト削減、所得向上につながる技術とし て広く普及するよう、技術や活用事例の紹介等にも取り組んで いただきたい。 		